

東京第1分所（川崎大島町）

笹本妙子

東京地区で最初に開設された収容所で、拿捕された船の船員、グアム島や香港で捕らわれた捕虜など、様々な国籍の捕虜がいた。京浜工業地帯を襲った激しい空襲もくぐり抜け、終戦まで存在した。

■ 所在地と歴史

1942年8月24日、川崎仮捕虜収容所として、川崎市大島町4丁目4番地に開設された。東京地区で最初に開設された収容所である。現在の大島4丁目交差点角、「川崎市営大島住宅」の辺りで、当時はこの場所に木造二階建ての労働者宿泊所（軍需品製造会社の青年教習学校という説もある）があり、その建物が捕虜宿舎に当てられた。

42年8月25日、最初の捕虜168名（英111、豪21、印9、米2、中7、加5、チェコ1、南米2、西アフリカ8、アイルランド1、ノルウェー1）が入所。

42年9月2日、善通寺収容所より25人（米24、蘭1）が入所。

42年9月15日、香港より100人（英）が入所。この時点で捕虜総数は293名となる。

42年9月25日、東京俘虜収容所第1分所と改称。

42年11月12日、川崎市扇町に新設された第1分所埠頭支所に捕虜の一部が移動。

43年5月12日、米捕虜250（270？）人が日本鋼管川崎工場内に新設された第7分所（のち第5派遣所）に移動。

44年9月20日、川崎市大師本町に新設された第23派遣所に捕虜60名が移動。

45年6月30日、第23派遣所から捕虜94名が第1分所に移動。

45年8月15日、終戦。この時点の収容捕虜は205名（英135、米48、豪8、他14）。収容中の死者は16名。

45年8月30日、川崎埠頭で捕虜たちが米海軍のスタッセン中佐に引き渡される。



終戦直後の収容所。中央十字路角の2階建。屋根にPWのマーク。（米公文書館蔵、工藤洋三提供）

■ 職員

分所長は、初代が竹内寛中尉、2代目が江守秀敏少尉、3代目が松尾中尉。

■ 捕虜

最初に収容された捕虜168名は、主にインド洋でドイツ軍に撃沈または拿捕された船の乗組員である。42年4月～5月、ドイツ軍仮装巡洋艦トール号(Thor)は英国商船のカークプール(S.S.Kirkpool)、ウェルパーク(Wellpark)、ウィルズドン(Willesdon)やノルウェー商船オースト(Aust)などを撃沈、さらにオーストラリア商船ナンキン号(S.S.Nankin)を拿捕した。これらの船の生存者は捕虜としてドイツ船リゲンズバーグ(Regensburg)に収容され、8月24日に横浜港に入港した。彼らはドイツ軍から日本軍に引き渡され、そのうち168名が第1分所に収容されたのである。彼らの大半が商船の乗組員、つまり兵士ではなく民間人で、国籍も様々だった。

なお、リゲンズバーグ乗船捕虜のうち、ナンキン号の負傷者や婦女子、何人かの船員、計105名は途中でドイツ船ドレスデン(Dresden)に移され、7月2日に横浜港に入港した。彼らは横浜港停泊中のドイツ船ラムゼス(MS.Ramses)に移された後、7月10日に福島島の抑留所に送られている。

9月2日に善通寺から移送された捕虜25名は、グアム島で捕まった米兵たちである。

9月15日に収容された捕虜は、香港のシャンシュイポ収容所から移送されたイギリス兵で、輸送船「マルシ」で横浜港に到着した。

開設から閉鎖までの間に何度か捕虜の出入りがあったようだが、一部を除いては不明である。

前任将校は、資料によって英軍のカント大尉と記すものと、米軍のニューマン(Newman)中佐(グアム→善通寺→第1分所→第5派遣所→第1分所)と記すものがあるが、途中交替があったのか、或いは英軍、米軍それぞれに前任将校がいたのかは不明である。

■ 労働

捕虜たちは、日本通運川崎支店(川崎駅)、三井埠頭倉庫、日本鋼管扇町工場、日満倉庫、荏原製作所川崎工場、味の素(のちに大日本化学)川崎工場、日清製粉川崎工場、京浜運河埋立地などで使役されたが、のちに各工場内に派遣所が開設されると、第1分所では川崎駅での荷役作業が中心になった。

昭和17(1942)年10月に神奈川県知事から東部軍司令官宛に送られた労務報告書によれば、捕虜を使役した効果として次の3点を挙げている。

- ① 事業主にとって……労働者不足が解消し、業務が計画的に進むようになった。
- ② 日本人労働者にとって……従来真面目な者は「捕虜に負けてなるものか」という気概を持ち、不真面目な者は不満を自重し、進んで就労するようになった。
- ③ 一般人にとって……従来神奈川県民は英米依存の傾向が強かったが、捕虜の姿を見て「戦争に負けるとこうなる、戦争には負けられない」という気持ちを持つようになった。

当時川崎市役所に勤務していた荒川利一郎氏は、毎日市役所の前を歩いて川崎駅の作業に向かう捕虜たちの隊列を眺めていた。

「市民がこの隊列に行き会ると、“尾羽打ち枯らした”異国の隊列を、小気味の悪い嘲笑のまなざしで足を止めては眺めたものだった。当時は既に戦線も銃後も全く消耗し尽くされ、等しく心身ともに困苦欠乏の淵に立たされていたが、この隊列を眺めたときは、勝敗

はこれからだという印象と錯覚を与えたものだった。(中略)これが軍隊なのかと思われるくらい頼りないもので、それが私たちに“勝てるぞ”の感を抱かせる」。

しかし荒川氏はまた、彼らの姿に自分たちの近い将来の姿を重ね合わせ、不安も覗かせている。

「ステッキを突きマドロスパイプをくわえて悠々と歩く英国の将校、スプーンやフォークを胸のポケットにのぞかせる兵士、飯盒に小さなフライパンをつけて下げる兵士、それぞれが唯一の財産として戦場から持ち続けてきた愛蔵品を何一つ手放そうとしない。空襲必死という現状で、やがて市民の一人一人がこの集団の兵隊のようになるのではあるまいか、そうした感慨が胸を閉ざす」。

川崎市内の工場に勤労働員されていた横須賀市立商業学校のある生徒は、川崎駅で見かけた捕虜の姿をこう描写している。

「駅の階段の下などに菰などを風よけにした小屋を作って彼等は出入りしていたが、其の姿はボロを纏い乞食同然で憐れであった。彼等は貨車からこぼれ落ちた米を拾い集めてはゴミを払い口に頬ばって生米を食べていたが、相当飢餓に苦しんでいたであろう」。

英国商船カークプール号の乗組員ボブ・デンマーク (Bob Denmark) は、最初は味の素の醤油製造工場で働いていたが、42年末からは川崎駅で貨物の積み下ろし作業に従事した。食べ物の荷が多く集まる駅は、飢えた捕虜たちの恰好の盗みの場となった。駅構内は広いので、隠れ場所には事欠かず、監視員の目を盗んでは生卵をすすったり、ミカンを皮ごとむさぼったり、盗んだ食品を衣服の中に隠して収容所に持ち帰ったりした。もちろん、見つければ厳しい懲罰が待っていたのだが。下級の日本人工員たちはとても親切で、捕虜に同情的だったが、捕虜に親切にしているのが見つかるのと彼ら自身が厳しく罰せられた。

一方、荒川氏はこんな捕虜の姿も目にしている。

「白墨を手に入れた兵士たちは有蓋者を黒板の代用品とした。昼の食事のデザートとして一時を楽しむものである。笑ったり、おどけて肩を叩き合ったりした。裸体画も描けば、即興詩も書く。ボロ布で消しては、また誰かが書いて哄笑する。(中略)そうした一時が過ぎると、将校らしい1人が落書きを消し、白墨を指先に軽やかにつまんで書いた。“U.S.A.-company will come to take us in a short time” (アメリカ軍がまもなく我々を迎えに来る) 書いてみせると、隣の仲間と握手を交わし合う。“それまでお互いに元気で待とう” というのである。」

日本鋼管に勤務していた荒井猪太郎氏は、担当部署で捕虜を6, 7人使っていた。

「パプリン工場のユイカル油を入れたものを積ませていた。あれ重いんだ。50～60kgもある。疲れてくると、ヘビー、ヘビーと俺のところへくる。タバコを2本ぐらい吸わせ休ませてから仕事を続けさせた。一緒にいると情がうつるからね。俘虜はタバコは朝、昼、夜と3本しかもらえない。(中略) 俘虜で勉強するのは、私にいろはを書かせて、しまいには覚えてしまった。」

ボブ・デンマークは扇町の日本鋼管で働いたこともあった。彼は4人の仲間とともに建築班に配置され、クレーンドライバーの吉田さんと助手の佐藤さんととても親しくなった。製鉄所の構内は広く、「フ」の腕章をつけた監視員の目も届かなかったので、自由な雰囲気の中で仕事を楽しみ、お陰で健康も回復し、見た目も明るくなった。

味の素の工場は、捕虜の使役期間中にアルミニウムなどを製造する軍需工場へと転換し、

「大日本化学株式会社川崎工場」と改称したが、この工場に関するエピソードは「第23 派遣所」のレポートで記すことにする。

■ 収容所の生活

英軍医療部隊のビル・スチュアート (Bill Stewart) 少佐は、戦後カナダ政府に提出した報告書に「川崎収容所に到着したときの俘虜たちの健康は申し分なかった。食事の変化で一時的な気持ちの落ち込みもあったが、健康は維持していた。医療設備はなにもなかったので、健康状態がよかったのは幸運というべきだろう」と記している。

とは言え、収容所生活が申し分なかったわけでない。宿舎は不潔でいつも南京虫に悩まされた、とボブ・デンマークは書いている。食事は朝昼晩とも小さな茶碗一杯の飯と具が少々のみそ汁だけで、毎日ほとんど変わらなかった。米が不足してくるとコーリャンや粗悪な大麦に代わっていった。昼食は収容所から職場まで木桶に入れて運ばれてくるが、夏場にはすえてしまう。時にはネズミの糞が入っていることもあったが、飢えているので何でも食べねばならぬ。冬はとても寒かったが、支給された衣服は粗末で、デンマークは味の素の工場から盗んだ醤油漉しの麻布でズボン下を作ってはいた。雨の時には蓑をまとして作業した。日本人職員による殴打は日常茶飯事だった。

しかしながら、スチュアート少佐は、のちに移された新潟の収容所に比べれば第1分所は模範的な収容所だったという。その理由を彼はこう記している。

- ① 日本が勝利の頂点にあって、戦争は長続きしないと日本が考えていた1942年の8月に収容されたから。
- ② 当時の俘虜たちは全員が健康だったから。
- ③ 日本軍は俘虜になった将校の身分を認めず、その権威を損なうことに努力したが、そのころはまだ、俘虜たちのなかで将校の権威が維持されていた。そして、将校俘虜たちは、殴打その他の虐待や酷使による挫折感、その結果として生じる志気の退廃や権威の無視などを経験していなかった。志気退廃や権威無視といったことがどういうものかは、のちに移された収容所のなかで証明された。
- ④ 前任将校のカント大尉は(中略)傑出した才能をもった指導者だった。俘虜たちを取り扱うには自分の協力が役に立つ、と言って日本軍の将校たちを説き伏せた。それを機転を利かせて実行し、日本軍の将校たちの煩わしい雑務を軽減してやった。やがて、日本軍の将校たちもその実効を認めたというわけだ。しかし、そういう要領のよさが、ときとして日本側と俘虜の双方から非難を浴びることもあったが、彼はそれに耐えていた。カントのような人材の活動が収容所の状況を良好に保つ要因の一つに数えられる。

■ 医療・死

日本人医師については不明だが、捕虜の医療については、最初はビル・スチュワート少佐が担当し、彼が43年10月末に新潟に移った後は、翌年4月に品川病室から移ってきた米陸軍のデイ (Day) 軍医が担当したと思われる。

収容所に到着した当時の捕虜は全員健康だったというが、栄養不足や過酷な労働が原因で多くの捕虜が病気になった。毎日夕方になると“病人点呼”が行われ、翌日労働に

出られるかどうかの判定が下されるが、その半分は仮病呼ばわれされ、罵倒されたり殴られたりした挙げ句、労働に出された。病人と判定された者も、医薬品の不足で満足な治療が受けられず、おまけに食事量を通常の半分か3分の1に減らされた。

こうした結果、終戦までに16人（英14、豪2）が死亡した。死因は肺炎、気管支炎、結核、マラリア、黄疸などいろいろだが、根本原因は栄養不足であった。英国商船カークプール号の船長ケニングストン（Kennington）は44年3月にカタル性肺炎で品川病室入院中に死亡した。James Colins（英）とAlfred Condon（英）は44年7月に航空機燃料を飲み、心不全となって死亡した。この燃料にはメチルアルコールや鉛などの毒性成分が含まれていた。酒か甘い飲み物を欲したのだろうか、哀れな死である。

捕虜が死亡すると仏式の葬式が行われた。僧侶が来てお経を上げ、棺は果物や米や花で飾られた。これらの供物は後で捕虜たちの食糧となった。遺体は三輪トラックでどこかへ運ばれていった。

■ 空襲・終戦

川崎地区は45年4月頃から、連日激しい空襲に見舞われた。第1分所は直撃を免れたが、屋根に降りかかる火の粉を200人の捕虜が総出で叩き消し、奇跡的に焼け残った。終戦直後に撮影されたp1の写真では、一面の焼け野原の中にまるで砂漠のオアシスのように収容所が残っている。ボブ・デンマークの体験記によれば、空襲の後、大勢の市民が収容所周辺に寄り集まってきたという。ここにいれば安全と考えたらしい。付近の住民たちは、収容所が焼け残ったのは、米軍がここに捕虜がいるのを知って爆撃を避けたからだと考えていたようだが、これは誤解である。あるB29の飛行士の証言によれば、彼らは爆撃目標地域に捕虜収容所があることを全く知らされていなかった。たとえ知っていたとしても、2,3000機もの上空からそこだけ避けて爆撃することは事実上不可能だった。実際、この収容所から3～4キロの距離にあった扇町の第2分所は、7月25日の空襲で直撃を受けて22名の捕虜が死亡しており、また横浜市鶴見区末広町の東芝工場内にあった第14分所は7月13日の空襲で破壊され、捕虜30名が死亡している。連合軍の上層部は国際赤十字からの通報によって日本国内にいくつもの捕虜収容所があったことを把握していたはずだが、日本を叩きのめすためには味方の捕虜を犠牲にすることも容赦しなかったのである。

8月15日の日本降伏については、翌日、収容所長から前任将校ニューマン中佐に正式に伝えられた。捕虜たちは毛布をつなぎ合わせて屋根にPW（捕虜収容所）のマークをつけ、やがて米軍機から救援物資が投下されるようになった。

捕虜の引き渡しは、正式には9月2日の降伏文書調印の後に行われることになっていたが、第1分所では8月30日に東京湾に集合との指示があり、捕虜たちは川崎の焼け跡を歩いて川崎埠頭に到着、米海軍のスタッセン中佐に引き渡された。そして上陸用舟艇で東京湾に停泊する病院船ヴェネボレンスに運ばれ、しばらく休養した後、横浜港→厚木飛行場→沖縄→マニラという経路で、それぞれの故国に帰還した。

■ 戦犯裁判

「模範的」と言われたこの収容所でも、職員や労働派遣先の工場従業員計10名が有

罪判決を受けた。各人の量刑は以下の通りである。

竹内寛（大尉）22年、江守秀敏（少尉）5年、前川一正（曹長）16年、田中一男（主計曹長）7年、鈴木慶蔵（衛生曹長）16年、小沢吉平（衛生軍曹）2年、宮崎博（軍属）30年、佐藤辰男（軍属）8年、下平直蔵（日本鋼管川崎工場）12年、川上春重（日本鋼管川崎工場）10年

軍属として捕虜の監視員を務めていた宮崎博氏は、自身の裁判についてこう記している。

「私の起訴状で一番重要な罪状項目は、第1項の“英軍俘虜フェンを不法に殴打により殺害せり”の項目であった。米軍弁護士もこの項は大変に重要であると真剣な顔付で、私に日本語の達者な通訳を通じて話をしてくれた。重要であるという事は、死刑になる事だと直感した。（中略）裁判の進行なかば、検事側から証人として、元俘虜のニューマン大佐が出廷した。彼は収容所時代前任将校として、俘虜のリーダー格で私とは大変に仲が良かった。裁判長ヤンシー大佐の“フェンは何が原因で死んだのか……”という問いに、ニューマン大佐は“彼は死ぬべき運命の人で、殴打が原因で死んだのではない”と答えた。この時米軍弁護士ウッド中尉は、私に笑顔を向けた。昭和21年4月29日、裁判の判決が下り、私は“重労働30年”を言い渡された。生命だけは助かったが、30年は長いなあ」と痛感していた」。

参考文献

- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書490号
- ・ 『京浜地区の捕虜収容所・中間報告書』笹本妙子著／アート出版／1999年
- ・ 『捕虜収容所補給作戦 B-29 部隊最後の作戦』奥住喜重・工藤洋三・福林徹著／2004年
- ・ 『川崎空襲・戦災の記録 戦時下の生活記録編』川崎市／昭和50年
- ・ 『シャベルⅢ～語り継ぐ町の歴史～第3号*特集*川崎区の戦争遺跡』川崎市教育文化会館シルバーセミナー0B 自主事業「私たちの町の歴史を掘り起こそう」編集委員会
- ・ 『お母さん、さようなら』横須賀市立商業学校第15・16期同期生一同／平成7年
- ・ 『真っ赤な空は忘れられない 戦争体験の記録』東京都北区
- ・ 『ゲストオブヒロヒト 新潟俘虜収容所1941-1945』ケネス・カンボン著／森正昭訳／1995年
- ・ 『横浜軍事裁判関係資料』外務省外交史料館所蔵
- ・ 『大日本帝国内地俘虜収容所』茶園義男編著／不二出版／1985年
- ・ 『BC 級戦犯横浜裁判資料』茶園義男編著／不二出版／1986年
- ・ ウェブサイト「POW 研究会」<http://homepage3.nifty.com/pow-j/index.htm>
- ・ ウェブサイト「Center for Research Allied POWS Under the Japanese」
<http://www.mansell.com/pow-index.html>